

## 第2章 台北から台中へ



台北市芝山公園 六氏先生の墓所

# 1 渡台

哲太郎は、明治29（1896）年12月、31歳の時に台湾に渡るが、この頃、熊本国権党の津田静一、高橋長秋（元有斐学舎舎長）らが中心となって同28年9月1日に台湾植民事業を決定。同月7日熊本市塩屋町（現熊本市新町）に台湾拓殖合資会社を設立して植民事業を開始しており、哲太郎は台湾移住に関する知識を同社から得たものと推測する。

哲太郎は、春日駅（現熊本駅）から当時熊本～門司間を走っていた10形蒸気機関車25号を利用して門司港を目指し、門司港からは同29年9月陸軍省命令航路と呼ばれる大阪～基隆間の航路ができていたので、門司から基隆を目指したと思われる。この航路は大阪商船が須磨丸など3隻を使用して運航し、鉄道と連絡していても便利であった。当時は門司～基隆間は乙船（2等船）で約50時間を要したようである。基隆からは蒸気機関車騰雲号に乗り、台北に赴いたと考えられる。



春日駅（現熊本駅）明治24（1891）年開業  
（熊日「熊本100年」引用）



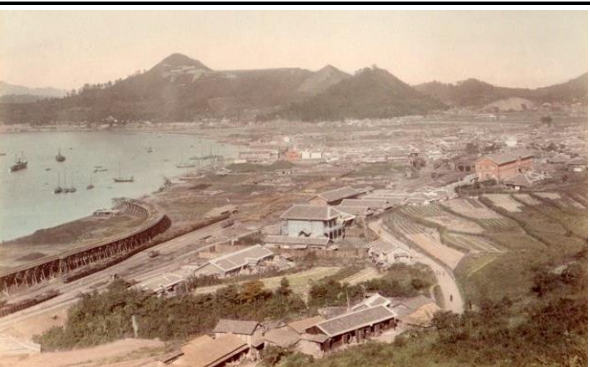
熊本門司間を走っていた10形蒸気機関車25号  
「日本蒸気機関車形式図集成」引用



初代門司駅 明治24（1891）年新設  
（九州の鉄道100年記念誌 鉄輪の轟き引用）



大阪商船門司支店  
（大阪商船株式会社80年史引用）

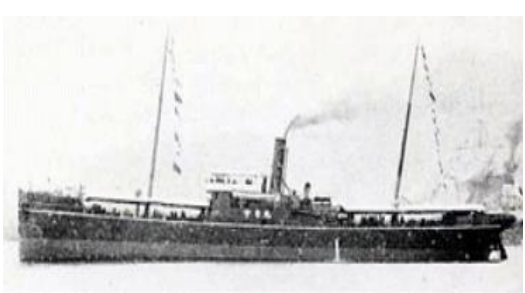


明治期の門司港（絵葉書引用）

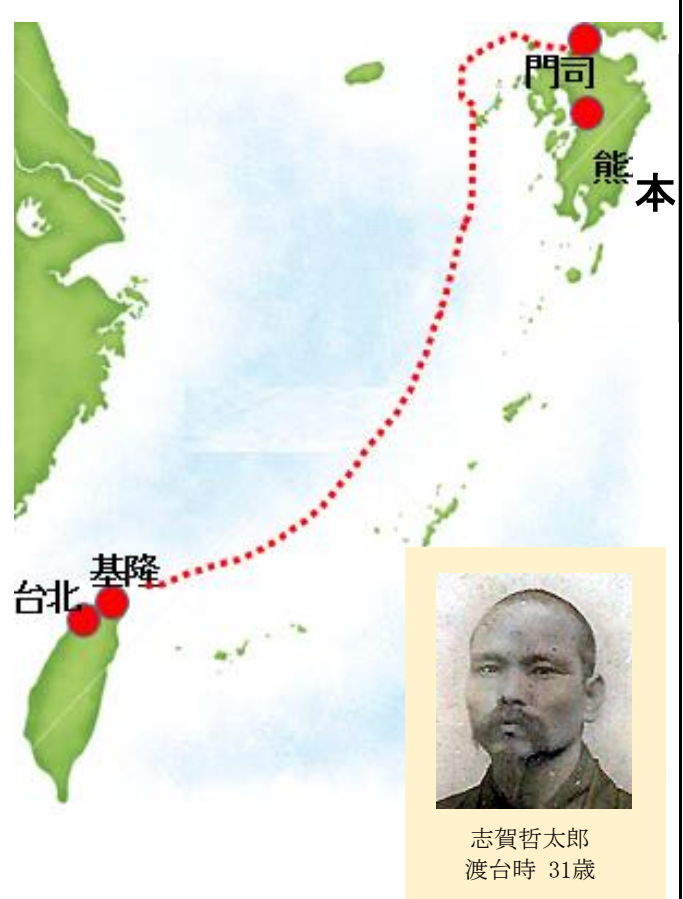
## 台湾拓殖合資会社

設 立 明治28年9月7日  
代 表 津田静一  
事務所 熊本市塩屋町裏一番町55番地  
目 的 移住による拓殖

（佐々博雄著「移民会社と地方政党」引用）



須磨丸  
(大阪商船株式会社80年史引用)



志賀哲太郎  
渡台時 31歳

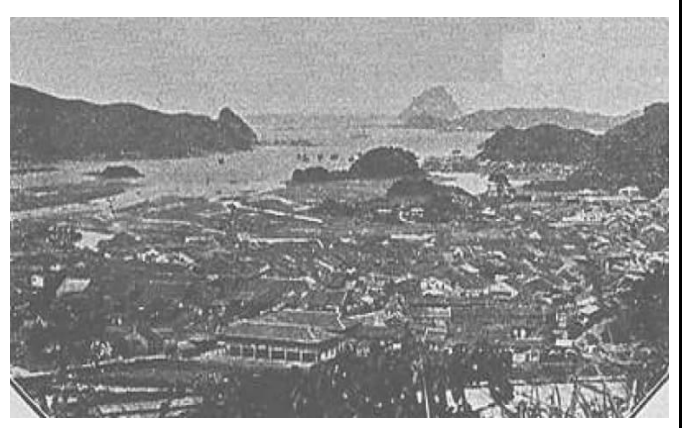
▲内地航線  
イ、神戸支店線 この航線は大船運船、元海軍船社の新製船六隻を以て神戸支店線を以て一五廿四と船も  
就船は付れも一万噸級で、スピードアップされ甲船ノ船に比し天々發航時刻を早にする。  
白一月一五三ノ船ノ其發航日共列下す。

行 先		船 名		日 時	
神 戸	門 司	第 一 日	正 午	甲 船	正 午
門 司	神 戸	第 二 日	正 午	乙 船	正 午
神 戸	門 司	第 三 日	正 午	甲 船	正 午
門 司	神 戸	第 四 日	正 午	乙 船	正 午

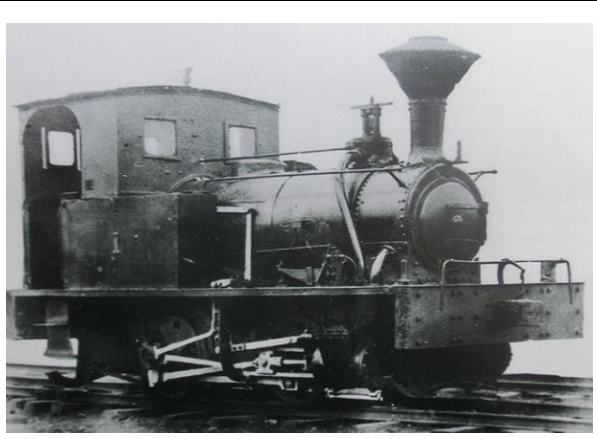
日 時 月 一 五 三 月 廿 四 日 廿 五 日 廿 六 日 廿 七 日 廿 八 日 廿 九 日 三 十 日

大 阪 商 船 株 式 會 社  
神 戸 支 店  
門 司 支 店

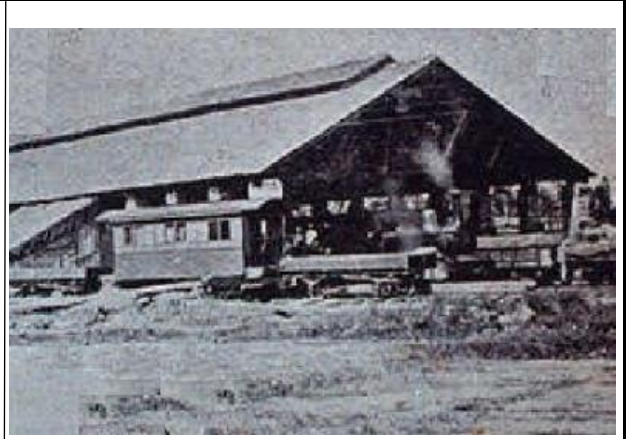
時刻表 (大阪商船株式会社80年史引用)



基隆港 (台湾名所写真帖引用)



騰雲号 (台湾鉄道の蒸気機関車について引用)



台北駅：明治24(891)年に基隆～新竹間開業  
(「台北写真帖」引用)

## 2 台北で酒店営業

哲太郎が台北に来たのは、台湾領有後1年。戦塵（せんじん）治まらず土匪の襲撃も各所で起きており、人心まだ恟々（きょうきょう）たる最中であつた。しかし、一面、日本が欧米列強を尻目に日清戦争に勝利し、植民地をはじめて獲得したのであるから、日本人の意気は軒昂（けんこう）たるものがあつた。明治29年、総督府条例施行後に役人登用が行われ、植民地加俸6割増という高給により内地から続々と人がやって来た。また、軍夫や軍の御用商人もそのまま居残る者が多く、一旗挙げんとの意気込みで台湾ブームが起きかけていた。

哲太郎の真意はあくまでも台湾子弟の教育にあり、その初志を遂げようとの熱意に燃えていたが、まだ教育制度も定まらず、職を得ることも出来なかつたので、台湾語の習得と当面の凌（しの）ぎとして、台北城西門近くの新起町に空き家を見つけ、改造して酒店を開いた。

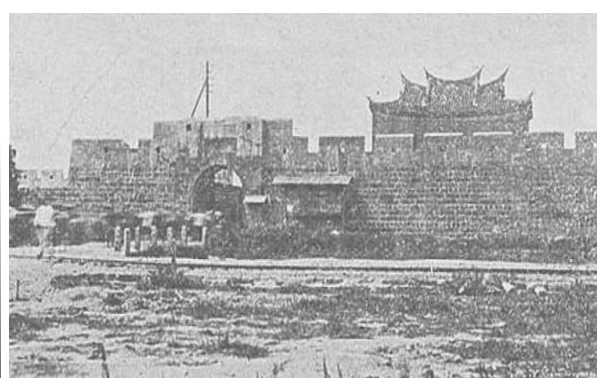
新起町は西門外の盛り場で、中央に赤煉瓦の台湾一の大市場があり、場内には食料品があふれ、売買の声で活況を呈していた。当時の台北は城内と城外に分かれ城壁があつた。城内の文武町には大倉下駄店、京都辻利の三好茶舗、その並びに日用雑貨の小島屋、西村食料品店、上田湯、本屋の新高堂などが開業していた。京都辻利の筋向いの小島屋と新高堂は、いずれも熊本の人であつた。北門町では村田印刷、江里口文具店、秋本毛糸店などが台湾商店の間に点在していた。

哲太郎の店は、酒の小売の傍ら腰かけて一杯飲ませる業態で、開拓景気に乗り、場所も良かったので一時は繁盛した。しかし、哲太郎は勘定にうとく、人が良いので売掛金の催促もできず、おまけに本人が酒好きときているので、客と一緒に酒を呑むなどして経営を圧迫、翌30(1897)年暮れには閉店のやむなきに至つた。

哲太郎が店を開いた新起町は現在漢中街と呼ばれ、当時の面影を残すのは西門江楼南側の漢中街商店街の通りくらいである。



昭和10(1935)年の台北地図



①台北城壁 「台北写真帖」引用



②西門 大正2(1913)年発行「台北写真帖」引用



③赤煉瓦の西門市場 「台北写真帖」引用

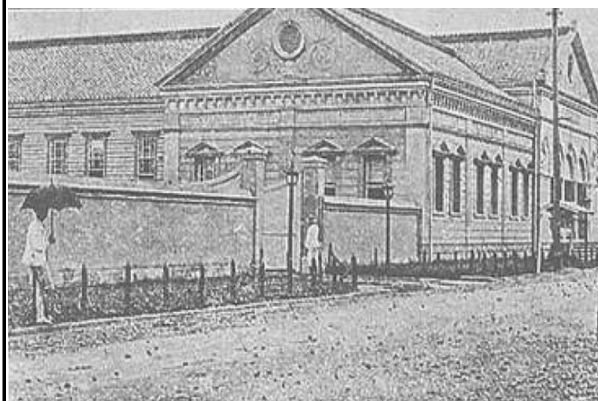


酒店経営  
志賀哲太郎  
当時 31歳



④哲太郎が酒店営業をした新起町  
大正2(1913)年発行「台北写真帖」引用

④漢中街（旧新起町）通り H29. 11撮影



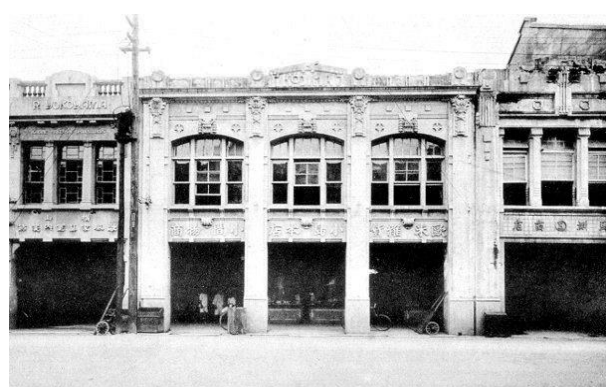
⑤台北郵便電信局北門街三丁目  
大正2(1913)年発行「台北写真帖」引用



⑥新高堂書店：文武町(1920年)撮影 創設者村崎長昶  
宇土市出身、1895年陸軍省雇員として訪台



⑦京都祇園辻利茶屋  
1895年三好徳三郎が文武町に開設した茶舗



⑧小島屋：台北市文武町 小島伊七（熊本）  
1862年出生、1896年開店 日用品雑貨販売

江里口文具店 大倉下駄店

●臺北商工會の  
産業調査會

▲各部分擔を決定す  
臺北商工會には去五日の總會に於  
て本島主要産業調査の件を可決せる  
が其後十八日更に常務委員會を置き協  
議の結果同會に産業調査委員會を置  
き左の通り分擔調査を爲すこととな  
したり最も小松會長、池田、三好の  
兩副會長は其各部に參與する等

▲産業調査會委員  
(委員長)木村匡

▲總務部委員 (主幹)赤石定藏、藤井徳  
太郎、中川小十郎、權澤軍之佐

▲産業部委員 (主幹)後富信太郎、平高  
寅太郎、幸頼榮、奥田市三郎、賀來倉太  
吳島才、排場徹、安田治太郎、河原泉、高  
石忠雄、星加三太郎、島山三郎、古殿啓  
次郎、渡邊信之介、土屋嶺三郎、岡本治郎  
太、高橋由義、夏千城夫、林泉仁、重田榮  
治、田原豊次郎、赤司初太郎、小川要七  
萩野徳藏、國部長治、齋藤豊次郎、辰本喜  
太郎、兒玉晉五郎、永瀨精介、瀧井貞次郎  
樹瀬和太郎、平田藤太郎、廣瀬、那、毛利  
千代次、中村勝次郎、浦田永太郎、渡野幸  
徳、山口忠三、松村健吉郎、眞殿一男、川  
川榮次郎、古賀隆太郎、黄東茂、陳朝輝  
邊藤祐太、藤生誠之、木村泰治、原田次郎

▲商業部委員 (主幹)羽鳥精一、西村武七  
藤田徳太郎、磯田光輝、塚本喜三郎、吉岡  
徳松、杉坂六三郎、田中福之助、黄若治  
藤川頼榮、岡田秋五郎、田中宇次郎、安文  
秀、福田定次郎、沖金五郎、武合平八郎  
宇治原寛大、桑田榮作、小林徳次郎、渡井  
渡三、矢橋春藏、松井精兵衛、近藤憲三郎  
羽野秀一、山本富次郎、藤田駒次郎、銀屋慶  
之助、佐倉祝二、山崎信一、藤田明清、小  
島伊七、瀧池政次郎、早川久兵衛、大倉  
九郎、田兵衛、熊天來、大塚久兵衛、大倉  
幸三、大藏徳太郎、吳澄海

▲財政金融部委員 (主幹)大野一平、佐田  
宋年、南翔吾、林熊藏、李景煥、柳松一造  
小倉文吉、生野政博、村田孝光、守永久米  
松江里口秀一、李延禧、韓九員、村崎  
長親、石黒光石、桂光風、奥村三郎

### 3 鉄道御用達商

哲太郎は32歳の時、酒店を閉店して熊本県人が多く住むという台中に向かった。新竹までは清朝が作った鉄道があったため汽車で行き、そこから徒歩で台中を目指した。当時、台湾総督府は高雄までの縦貫鉄道計画を進めており、鉄道工事の最大の難関は三叉から豊原間の山間部で、この間はトンネルや橋をかけての区間であったため、三叉の南から谷に沿って鉄道建設の調査用資材を運ぶ線路が敷設されていた。哲太郎はこの資材運搬線路を辿って終点の苗栗県伯公坑に着き、住居を求め、鉄道工事関係者を相手に台北と同様の酒提供の店をはじめることにした。そこで女中として熊本県河内村出身の島村ソデ（当時31歳）を雇った。「志賀哲太郎傳」では伯公坑駅は台湾縦貫鉄道の終点とあるが、資材運搬線の終点の間違いである。

哲太郎が住まいとした伯公坑について、土地の所有者である邸細亮氏に案内してもらったところ、同所は雑木林の山中にあり、トロッコを走らせたと思われる線路跡や煉瓦造りの伯公坑駅跡があった。駅跡からさらに西へ約50メートルの石畳を進むと、広さ約3,000平方メートルの拓けた場所があり、そこには2基の納骨堂があった。邸氏によると、この場所は戦前の集落跡で30世帯位が暮らしていたそうである。哲太郎は、この場所に居住したものと思われる。

台北	2,037人	嘉義	277人
台南	772人	台東	110人
台中	765人	屏東	109人
高雄	735人	彰化	95人
花蓮	463人	宜蘭	50人
新竹	370人	澎湖	32人
基隆	306人	計	6,119人

熊本から台湾への移民について引用



鉄道御用達商  
志賀哲太郎 当時32歳

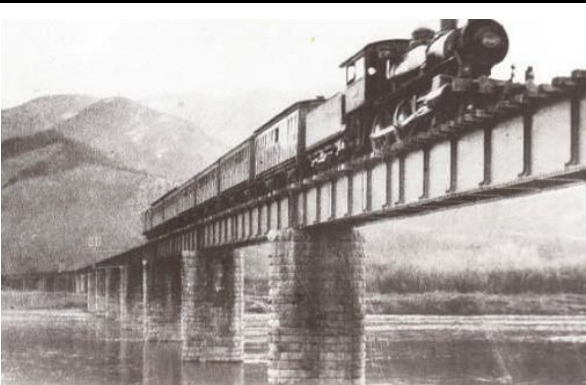




台北駅（「台北写真帖」引用）



大正2年撮影の新竹駅（「台湾全島写真帖」引用）



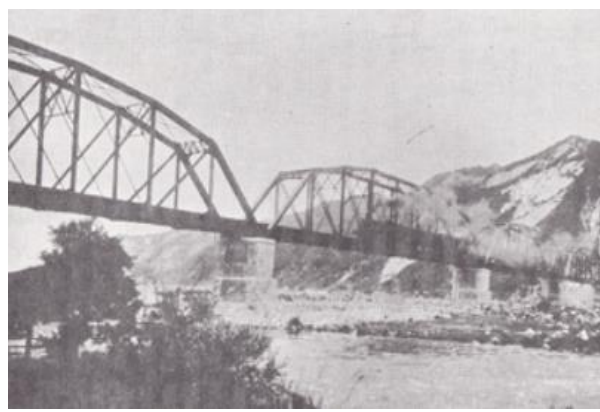
台湾縦貫鉄道（「台湾鉄道」引用）



資材運搬線図



伯公坑－建山線路（張慶宗氏提供）



大甲溪橋梁（「台湾鉄道」引用）



伯公坑の地図



伯公坑を望む（張慶宗氏提供）



資材運搬線路跡（H29. 11撮影）



伯公坑駅跡（H29. 11撮影）



哲太郎が店を構えた伯公坑集落跡(H29. 11撮影)



伯公坑駅から集落をつなぐ石畳(H29. 11撮影)

## 4 土匪・マラリア

かつて下関条約交渉で李鴻章は台湾には四害があると言って日本に台湾統治を諦めさせようとした。四害とは阿片、土匪（どひ）、生蕃、瘴癘（しょうらい）で、このうち土匪（＝掠奪・暴行する武装集団）と瘴癘（マラリア）の二害に哲太郎は遭遇したのである。ある夜、土匪の襲撃に遭い財物は取られ、危うく命を落とすところであったが、ソデの機転により助かった。悪いことは続くもので、今度はマラリアに罹り、危篤に瀕して担ぎ込まれたのが大甲の鎮瀾宮（ちんらんぐう）にある台中陸軍衛戍（えいじゅ）病院大甲分院であった。

明治7（1874）年の台湾の役出兵の際、日本軍兵士3,600人のうち、2,800人が台湾熱と呼ばれるマラリアにかかり525人が死亡している。明治28（1895）年の台湾平定でも4,000人を超える兵士が死亡し、生存率は約30パーセントと最も恐れられていた。台湾マラリア蚊類の隆盛期は11月で、感染者は2カ月以内に死亡していた。哲太郎がマラリアにかかったのは、教員採用面接の明治32年2月を基準にすると、明治31（1898）年11月頃と思われる。伯公坑から陸軍病院までの哲太郎の搬送ルートについて、台中市郷土史家の張慶宗氏は、当時の搬送手段は人力車で、ルートは大安溪を渡って后里から外埔を通って大甲に入ったものと思われると説明し、現地を案内した。

哲太郎を搬送したルート

李鴻章

マラリア感染  
哲太郎 当時33歳

明治30年代の人力車  
（台北写真帖引用）

大甲溪川渡し（柳辺書店発行写真引用）

明治44年～大正元年	感染率
4	6.25
5	12.37
6	2.84
7	0
8	7.92
9	12.4
10	20
11	29.95
12	13.59
1	22.63
2	9.52
3	7.94

マラリア感染報告書  
（台湾総督府資料引用）

哲太郎が入院した陸軍病院（鎮瀾宮）  
昭和11（1936）年撮影（「大甲鎮志」引用）

○臺中衛戍病院  
長 德門  
病院附

- 三等軍醫正 林 豐林
- 三等軍醫正 馬 爲之
- 一等軍醫正 中 村省三郎
- 一等軍醫正 熊 坂彌之次
- 一等軍醫正 鶴 見金十郎
- 二等軍醫正 八 村口真郎
- 二等軍醫正 八 村百六郎
- 二等軍醫正 八 村石松
- 二等軍醫正 八 川 尻政太郎
- 二等軍醫正 八 川 三宅義秀
- 二等軍醫正 八 山 重彦
- 三等軍醫正 八 林 俊道
- 三等軍醫正 八 齋 藤 藏
- 三等軍醫正 八 川 島 慶治
- 三等軍醫正 八 上 野 孝信郎
- 一等藥劑官正 七 堀 六堀 口 廣助

台中衛戍病院医師  
（明治31年台湾総督府職員録引用）



## 5 大甲

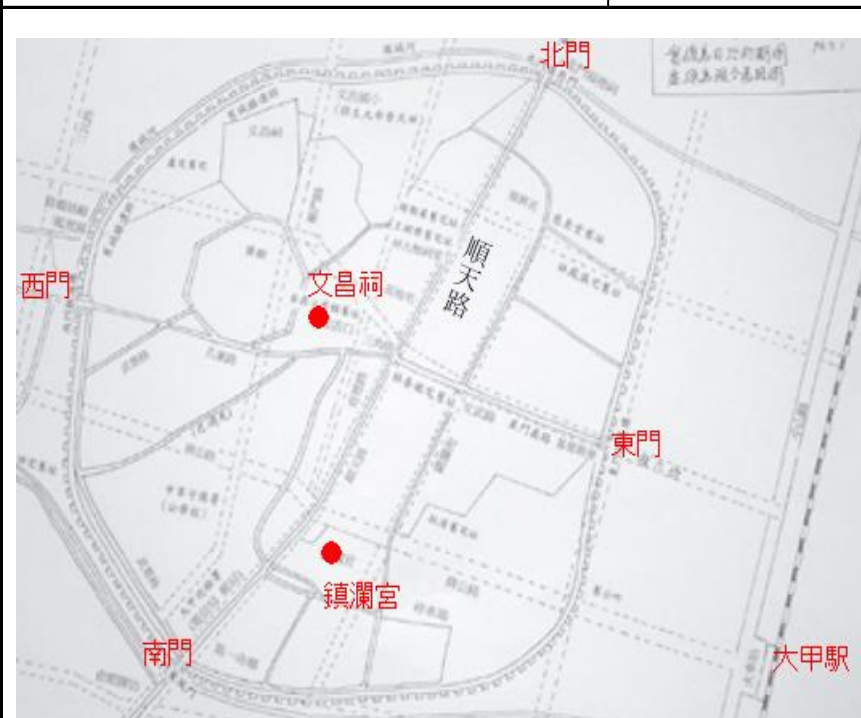
大甲は台湾中部の要衝地で大陸からのジャンク船がしきりに往復した。商人はジャンク船を大安港に着け、大甲城に入った。大甲城を拠点にして北は竹南、南は彰化、東は台中に入り商売を行っており、大甲街は商売の街であるとともに行政の中心でもあった。街は東西南北に四つの門があり、高さ約6メートルの城壁をめぐるようにしていた。城内は四堡に分けられ大きな道が十字に交叉した赤煉瓦の街並みであった。城は丸石で固めた堅ろうな建物で生蕃がかつて攻めたが難攻不落で、日本軍も苦戦したということである。城内は十字路を中心に西に文昌祠、東南に媽祖廟（鎮瀾宮）があり、住民は福建省から来た人が大部分で人情味が厚く住みよい街であった。産業は米、砂糖を主とし、特産として大甲帽、大甲蓆を産した。哲太郎が陸軍病院大甲分院に運び込まれた明治31年頃は人口約3,000人、付近の外埔、内埔、大安、日南の各庄を加えて約8000人であった。



明治中期台湾西部の港（台湾老照片引用）



大甲城北門 明治32年撮影（台湾老照片引用）



大甲城図(大甲鎮誌引用)



ジャンク船（台湾老照片引用）



台湾中部の生蕃サオ族 明治34年撮影  
(台湾生蕃種族写真帖引用)



大甲帽蓆同業組合 (大甲鎮志引用)



大甲街順天路 明治38(1905)年撮影  
(大甲鎮志引用)



大甲製帽工廠職員 大正13(1924)年撮影  
(大甲鎮志引用)



大甲の赤煉瓦建物 (H29.11撮影)



大甲帽蓆作業 (大甲帽蓆手工編織老片引用)



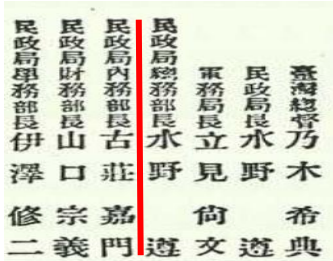


紹介状を書いた  
安達謙蔵  
国権党党務理事  
哲太郎面接時 35歳



家永署長の上司だった  
群馬県知事 古荘嘉門  
元台南県知事  
元台湾植民隊隊長  
哲太郎面接時 58歳

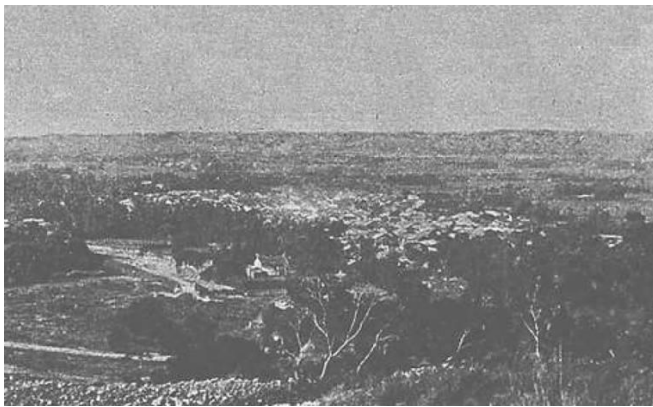
明治29 (1896)	新竹法院 判官
明治29 (1896)	新竹支庁 書記官
明治30 (1897)	新竹弁務署
明治31 (1898)	苗栗弁務署
明治34 (1901)	苗栗弁務署
明治35 (1902)	苗栗庁
明治42 (1909)	新竹庁
大正 3 (1914)	新竹庁
家永泰吉郎の人事記録 (台湾総督府職員録引用)	



明治29年	1896年	台湾総督府評議会 評議員
同上	同上	民政局内務部長 事務官

古荘嘉門の台湾総督府での記録  
(台湾総督府職員録引用)

古荘嘉門は民生局内務部長 (台湾総督府職員録引用)



苗栗弁務署がある苗栗街 (臺灣写真帖引用)

### 国語伝習所規則(1896年6月発布)

- 第1章 本旨及種類
- 第1条 国語伝習所ハ本島人ニ国語ヲ教授シテ其日常ノ生活ニ資シ、且本国的精神ヲ養成スルヲ以テ本旨トス
- 第13条 本所ハ国語ノ伝習ヲ以テ本旨トスト雖常ニ道德ノ教訓ト智能ノ啓発トニ留意スルヲ要ス 道德ノ教訓ハ皇室ヲ尊ビ本国ヲ愛シ人倫ヲ重シセシメ以テ本国的精神ヲ養成スルヲ旨トシ...

### 台湾公学校令(明治三十一年勅令第一七八号)

- 第一条 公学校ハ街庄社又ハ敷街庄社ニ於テ其ノ設置維持ノ経費ヲ負担シ得ルモノト認ムル場合ニ限り知事庁長之カ設立ヲ認可スルモノトス
- 第二条 公学校ノ種別、編制、教則等ハ台湾総督ノ定ムル所ニ依ル
- 第三条 公学校ニ就学スル生徒ノ父兄又ハ後見人ハ授業料ヲ納ムヘシ其ノ金額並ニ収入ノ方法ハ知事庁長之ヲ定メ台湾総督ノ認可ヲ受クヘシ
- 第四条 第一条ニ掲クル経費負担ノ概目ハ左ノ如シ
  - 一 校舍校具及体操場ノ設備並ニ其ノ維持ニ要スル諸費
  - 一 職員ニ関スル諸費俸給並ニ旅費ヲ除ク
  - 一 学務委員ニ関スル諸費
  - 一 前各項外ノ校費
- 第五条 寄附金其ノ他ノ収入金ヲ以テ前条ニ掲クル一切ノ校費ヲ支弁シ得ル場合ニ於テハ授業料ヲ徴収セサルコトヲ得
- 2 収入支出ノ方法ハ知事庁長之ヲ定メ台湾総督ノ認可ヲ受クヘシ
- 第六条 公学校資産ノ管理ニ関スル規程ハ知事庁長之ヲ定ム
- 第七条 公学校ノ教科用図書ハ台湾総督ノ検定ヲ経タルモノタルヘシ
- 第八条 公学校教員ハ台湾総督ノ検定ヲ経タル公学校教員免許状ヲ有スル者タルヘシ
- 第九条 弁務署長又ハ支署長ハ知事庁長ノ命ヲ承ケ公学校ヲ管理スヘシ
- 第十条 公学校設置区域内ニハ二名以上ノ学務委員ヲ置クヘシ其ノ職務ニ関スル規程ハ知事庁長之ヲ定ム
- 附 則
- 第十一条 本令ハ明治三十一年十月一日ヨリ施行ス